

留学生の「適応に要する時間」 に関する分析

村田 雅之

I はじめに

環境移行者の適応過程については、適応の「位相」や「型」に着目した多くの議論がなされてきた。帰国生等を対象とした研究においては、適応に要する時間に焦点をあてた議論がしばしばみられる⁽¹⁾。しかし、日本で学ぶ外国人留学生に関する研究において、「適応に要する時間」が中心的な視点として設定されることは未だ少ない。

適応する領域には、様々なものが考えられるが、各々の間で適応過程に時間的な差異が存在することが予測される。そこで、複数の対象領域を設定して、各々の領域の適応にはどのくらいの時間を要するのかを示し、またその差異について論ずることには、意義があると思われる。

ところで、日本で学ぶ留学生は、来日後に日本の大学（院）に対する「新入生」という側面を有する。したがって、留学生と日本人の新入生との適応過程の対照を行なうことは、重要な作業であると考えられる。しかし、この点に着目した研究は少ない⁽²⁾。また、日本から帰国した外国人留学生については、調査研究自体が困難なこともあり⁽³⁾、帰国後の再適応に要する時間に関する分析は少ない。

以上のような状況のもとで、外国人留学生の環境移行に伴う適応過程を、「適応に要する時間」の視点から論ずることには、大きな意義があると思われる。

「適応」の概念規定に関しては、従来様々な議論がなされてきている⁽⁴⁾。概念そのものを詳細に論ずることは、本稿の及ぶところではない。そこで、本研究においては、様々な領域に対する「慣れ」を通して、適応過程を考察したい。すなわち、設定した各項目について、「次のことに慣れるのに、……してからどのくらいの時間がかかりましたか」（点線部は「来日」等の環境移行機会）とたずね、その回答の期間を「適応に要する時間」として操作的に定

義した⁽⁵⁾。

次章以降では、各質問紙調査（在日中国人留学生調査、帰国中国人留学生調査、1年次生調査）における、上記の質問形式部分を順に分析していく。すなわち、「在日中国人留学生の来日後の適応過程」（II章）、「帰国中国人留学生の留学中の適応過程および帰国後の再適応過程」（III章）、「大学新入生の入学後の適応過程」（IV章）について順に論ずる。

II 在日中国人留学生の来日後の適応過程

1 調査の概要

調査の概要、回答者の主な属性は、以下の通りである（表1、表2）。

表1 在日中国人留学生調査の概要

在日中国人留学生調査	
調査対象者	日本の大学（院）に留学中の中国人留学生
調査実施	1990年12月～1991年1月
調査方法	直接配布または郵送／直接回収または同封の封筒にて返送
標本数	436票
回収率	126票（28.9％）
備考	①回収率は1991年1月現在である。期日以降に回収した14票については、上記回収率および本研究の議論には含めていない。 ②中国語調査票、日本語調査票、返送用封筒（切手貼済）、挨拶状を同封して配布した。

表2 回答者の主な属性（在日中国人留学生）

性別	男（68.3％）、女（31.7％）
年齢	20～24才（3.4％）、26～29才（43.7％）、30～34才（31.0％）、35～39才（15.1％）、40～49才（4.0％）、50～54才（3.2％）
留学期間開始	1981～85年（10.3％）、86年（8.7％）、87年（15.1％）、88年（16.7％）、89年（14.3％）、90年（27.0％）、無回答（7.9％）
留学大学（院）	21大学（特定の工業大学52.4％）
所属課程	学士（0.8％）、修士（23.8％）、博士（31.0％）、研究生（33.3％）、訪問学者（11.1％）

専攻分野	人文 (6.3 %), 社会 (6.3 %), 教育 (4.0 %), 芸術 (2.4 %), 理学 (7.1 %), 工学 (61.1 %), 農学 (0.8 %), 医・薬・歯学 (9.5 %), 家政 (0 %), その他 (2.4 %)
留学生の区分	日本政府国費 (15.9 %), 政府派遣 (27.0 %), 私費 (38.9 %), 所属機関派遣 (17.5 %)
奨学金	受けている (61.1 %), 受けていない (34.9 %)
住居	留学生会館・寮 (59.5 %), 日本人も一緒に寮 (2.4 %), 民間アパート・下宿 (33.3 %), その他 (4.8 %)
未婚既婚	未婚 (34.9 %), 既婚 (現在同居) (25.4 %), 既婚 (現在同居せず) (38.1 %)
過去に日本で取得した学位	ない (63.5 %), 学士 (2.4 %), 修士 (22.2 %), 学士と修士 (4.8 %), その他 (6.3 %)
留学前の最終学位	高校 (4.8 %), 専門学校 (0.8 %), 大学同等学歴 (7.1 %), 学士 (67.5 %), 修士 (19.0 %), 博士 (0 %)
日本の大学(院)入学前の日本語学習	日本の日本語学校 (17.5 %), 中国の大学 (19.0 %), 中国政府の日本語予備学校 (23.8 %), 日本語専修班 (12.7 %), 独習のみ (17.5 %), 学習しなかった (4.8 %), その他 (2.4 %)

2 在日中国人留学生の来日後の適応過程

まず、在日中国人留学生の来日後の適応過程を、前章での定義に基づき「慣れ」の視点から分析する。ここでは、「日本の気候」「日本の食事」「日本の住宅条件」「日本の社会習慣・風俗」「日本の大学の教育方法」「日本人の人間関係」「日本人の考え方・価値観」「日本での留学生生活全般」の8つの領域を設定し、各項目について、「次のことに慣れるのに、来日してからどのくらいの時間がかかりましたか」とたずねた。領域別に単純集計(表3)と累積比率(表4)を示す。

各表には、留学期間が2年間に満たない留学生も多数含まれている。したがって、この領域に慣れるにはこのくらいの期間を要する、といった議論を、各表から直接におこなうことはできない。そこで、まず領域間の相違に重点を置いて論じ、後で期間を含めた議論をおこなう。

各表をみると、「日本の気候」「日本の食事」「日本の住宅条件」など、生活の基本的条件についての慣れは比較的早い。「日本の社会習慣・風俗」や「日本の大学の教育方法」は、上の3項目に比べると、来日初期にやや遅れる。そして、「日本人との人間関係」や「日本人の考え方・価値観」に慣れるのは、

表 3 来日後慣れるのにかった時間（在日中国人留学生（N=126））（％）

時 間 項 目	来日後 1 月 以内	来日後 1 月～ 6 月	来日後 6 月～ 1 年	来日後 1 年～ 2 年	来日後 2 年 以上	まだ 慣れて いない	無回答
日本の気候	78.6	14.3	4.0	1.6	0	0.8	0.8
日本の食事	47.6	30.2	7.1	4.0	1.6	7.9	1.6
日本の住宅条件	51.6	18.3	7.1	2.4	4.0	11.9	4.8
日本の社会習慣・風俗	17.5	34.1	23.0	6.3	4.0	8.7	6.3
日本の大学の教育方法	15.9	28.6	20.6	13.5	4.8	10.3	6.3
日本人の人間関係	15.1	16.7	20.6	10.3	7.9	26.2	3.2
日本人の考え方・価値観	10.3	16.7	15.9	18.3	6.3	27.8	4.8
日本での留学生活全般	11.1	28.6	23.0	15.1	7.1	8.7	6.3

表 4 来日後慣れるのにかった時間(累積比率)（在日中国人留学生（N=126））（％）

時 間 項 目	来日後 1 月 以内	来日後 6 月 以内	来日後 1 年 以内	来日後 2 年 以内	来日後 2 年 以上	まだ 慣れて いない	無回答
日本の気候	78.6	92.9	96.8	98.4	98.4	0.8	0.8
日本の食事	47.6	77.8	84.9	88.9	90.5	7.9	1.6
日本の住宅条件	51.6	69.8	77.0	79.4	83.3	11.9	4.8
日本の社会習慣・風俗	17.5	51.6	74.6	81.0	84.9	8.7	6.3
日本の大学の教育方法	15.9	44.4	65.1	78.6	83.3	10.3	6.3
日本人の人間関係	15.1	31.7	52.4	62.7	70.6	26.2	3.2
日本人の考え方・価値観	10.3	27.0	42.9	61.1	67.5	27.8	4.8
日本での留学生活全般	11.1	39.7	62.7	77.8	84.9	8.7	6.3

さらにはかなりの時間を要することがわかる。年齢別、性別にみても、この傾向は概ね一貫していた。

すなわち、「気候等の基本的な生活環境」→「社会習慣／教育方法」→「人間関係／考え方・価値観」の順に慣れていくのであり、日本人とのコミュニケーションに直接関与する領域が最も慣れにくい、ということが、全体の分布から推測できる。この結果は、「日本の食事」や「日本の習慣」などよりも、

「日本人の考え方」「日本人のコミュニケーション」といった、日本人との人間関係に直接かかわる事項のほうが留学生にとって大きな障害として認識される、と指摘した岩男・萩原の議論⁽⁶⁾とも整合的であるといえる。

なお、「留学生生活全般」は、各領域に比べて最も遅れた分布を示すのではなく、中間的な分布を示している。逆にみれば、全般的には慣れたと判断されても、かならずしも個々の領域すべてに慣れているわけではない、ということになる。

次に、留学開始（留学期間）別に示すと、表5のようになった。

留学期間の長短でわけてみても、概ね「気候等の基本的生活環境」⇒「社会習慣／教育方法」⇒「人間関係／考え方・価値観」の順に慣れが早い傾向は、全体の分布でみたときと同様に示されている。

仮設的な基準として、少なくとも6割が慣れたとしている期間（累積比率がはじめて6割を越える期間）を、各群・各項目においてみていくと、あくまで傾向ではあるが、「気候」には1月、「食事」「住宅条件」には半年、「社会習慣」「教育方法」には1年、「留学生生活全般」には1～2年、「人間関係」「考え方・価値観」には2年程度を要することが指摘できるであろう⁽⁷⁾。

次に、最も慣れの遅い「人間関係」と「考え方・価値観」に着目してみよう。来日後1年以内の留学生では、4割が「人間関係」に、半数が「考え方・価値観」に「まだ慣れていない」ことがわかる。また、5年以上の滞日期間があっても、2～3割が「まだ慣れていない」のである。5年以上の場合、他の項目では最大でも7.7%（1名）であるから、その領域差は明確である。後述のように、各群で「慣れ」の捉え方が異なるとしても、この2領域が日本適応のいわば「律速段階」となる可能性は指摘できよう。

ところで、「留学生生活全般」などの領域において、留学期間が短い群ほど「慣れた」との評価が早い傾向がみられる。これは、留学生をめぐる環境が改善されたため、最近の留学生は慣れが早くなってきている、という側面もあるかもしれないが、むしろ留学生生活を送るうちに、文化的な相違などがみえるようになり、「慣れ」ということに対する感覚や捉え方が変化してきたことに帰因する、とも考えられるであろう。すなわち、留学期間が長いほど、現在の状況から逆算して「慣れ」の段階への要求水準が高くなったから、という理由が考えられる。

以上、在日中国人留学生の来日後の適応過程を、8領域に対する「慣れ」の視点から分析してきた。ここでは、領域別の現状を簡単に指摘するにとどまる。しかし、領域間にかなりの時差があること、「気候等の基本的生活環境」

表 5 来日後慣れるのにかかった時間（留学期間別）（在日中国人留学生）（％）

留学開始	時 間 項 目	来日後 1月 以内	来日後 1月～ 6月	来日後 6月～ 1年	来日後 1年～ 2年	来日後 2年 以上	まだ 慣れて いない	無回答
～1985 年 （5 年 以上） （N=13）	日本の気候	61.5	23.1	7.7	7.7	0	0	0
	日本の食事	46.2	30.8	7.7	7.7	0	7.7	0
	日本の住宅条件	46.2	15.4	23.1	0	7.7	0	7.7
	日本の社会習慣・風俗	7.7	15.4	53.8	7.7	7.7	0	7.7
	日本の大学の教育方法	7.7	15.4	38.5	15.4	15.4	7.7	0
	日本人の人間関係	0	7.7	23.1	30.8	15.4	23.1	0
	日本人の考え方・価値観	0	7.7	7.7	38.5	7.7	30.8	7.7
	日本での留学生活全般	7.7	15.4	7.7	38.5	15.4	7.7	7.7
1986 ～87 年 （3 年 以上） （N=30）	日本の気候	83.3	10.0	6.7	0	0	0	0
	日本の食事	33.3	33.3	13.3	6.7	3.3	10.0	0
	日本の住宅条件	30.0	30.0	6.7	6.7	13.3	13.3	0
	日本の社会習慣・風俗	10.0	30.0	26.7	13.3	13.3	3.3	3.3
	日本の大学の教育方法	13.3	16.7	30.0	20.0	10.0	3.3	6.7
	日本人の人間関係	13.3	6.7	23.3	23.3	13.3	20.0	0
	日本人の考え方・価値観	6.7	13.3	23.3	26.7	13.3	16.7	0
	日本での留学生活全般	10.0	16.7	50.0	10.0	10.0	0	3.3
1988 ～89 年 （1 年 以上） （N=39）	日本の気候	74.4	17.9	2.6	0	0	2.6	2.6
	日本の食事	56.4	23.1	5.1	5.1	2.6	2.6	5.1
	日本の住宅条件	53.8	15.4	5.1	2.6	0	15.4	7.7
	日本の社会習慣・風俗	23.1	25.6	28.2	7.7	0	7.7	7.7
	日本の大学の教育方法	20.5	30.8	17.9	12.8	0	7.7	10.3
	日本人の人間関係	20.5	20.5	17.9	5.1	7.7	20.5	7.7
	日本人の考え方・価値観	15.4	15.4	17.9	17.9	5.1	20.5	7.7
	日本での留学生活全般	15.4	23.1	17.9	20.5	5.1	7.7	10.3
1990 年 （1 年 以内） （N=34）	日本の気候	82.4	11.8	2.9	2.9	0	0	0
	日本の食事	47.1	35.3	5.9	0	0	11.8	0
	日本の住宅条件	64.7	14.7	5.9	0	0	11.8	2.9
	日本の社会習慣・風俗	17.6	50.0	8.8	0	0	17.6	5.9
	日本の大学の教育方法	11.8	38.2	11.8	5.9	2.9	23.5	5.9
	日本人の人間関係	14.7	20.6	20.6	0	0	41.2	2.9
	日本人の考え方・価値観	5.9	23.5	14.7	2.9	0	50.0	2.9
	日本での留学生活全般	5.9	47.1	14.7	5.9	2.9	20.6	2.9

（注） 一部記入ミスと思われる項目（滞在期間より長い期間を選択）があるが、そのまま表示した。

また、太線は 6 割が慣れた期間を示す。

⇒「社会習慣／教育方法」⇒「人間関係／考え方・価値観」の順序が存在することなどを示すことができた。

上のような結果は、各領域に分けて分析することで、はじめてわかることである。このことは、「留学生の適応に関する問題を考察する際には、いくつもの指標を手がかりとして多面的に検討する必要がある」⁽⁸⁾といった既存の指摘とも整合的である。適応に関する今後の研究においては、この点を意識すべきであることを指摘したい。

III 帰国中国人留学生の留学中の適応過程および帰国後の再適応過程

1 調査の概要

調査の概要、回答者の主な属性は、以下の通りである（表 6、表 7）。

表 6 帰国中国人留学生調査の概要

帰国中国人留学生調査	
調査対象者	日本の大学（院）に留学して帰国した中国人留学生
調査実施	1990 年 8 月
調査方法	中国への郵送（航空便）／同封の封筒にて返送
標本数	110 票
回収率	58 票（52.7 %）
備考	<p>①対象者は、北京在住者および東京都内の T 大学卒業者である。訪問学者を含む。</p> <p>②回収率は 1990 年 10 月現在である。大幅に遅れた 2 票については、上記回収率および本研究の議論には含めていない。</p> <p>③中国語調査票、日本語調査票、返送用封筒（中国切手貼付済、またはインターナショナル・クーポン同封）、挨拶状を同封して、エアメールにて発送した。</p>

表 7 回答者の主な属性（帰国中国人留学生）

性 別	男（74.1 %）、女（24.1 %）
年 齢	27～29 才（12.1 %）、30～34 才（20.7 %）、36～39 才（25.9 %）、40～44 才（8.6 %）、45～49 才（3.4 %）、50 才～（27.6 %）、無回答（1.7 %）
留学期間開始	1979～81 年（13.8 %）、82 年（41.4 %）、83 年（17.2 %）、84 年（8.6 %）、85 年（10.3 %）、86 年（3.4 %）、88 年（1.7 %）、無回答（3.4 %）

留学期間終了	1981～83年(6.9%), 84年(6.9%), 85年(15.5%), 86年(10.3%), 87年(6.9%), 88年(41.4%), 89年(3.4%), 90年(3.4%), 無回答(5.2%)
留学大学(院)	29大学
所属課程	学士(1.7%), 修士(5.2%), 博士(27.6%), 研究生(15.5%), 訪問学者(27.6%) (複数分類等22.4%)
専攻分野	人文(0%), 社会(0%), 教育(3.4%), 芸術(3.4%), 理学(8.6%), 工学(69.0%), 農学(1.7%), 医・薬・歯学(10.3%), 家政(0%), その他(3.4%)
留学生の区分	日本政府国費(29.3%), 政府派遣(50.0%), 私費(8.6%), 所属機関派遣(8.6%)
奨学金	受けていた(81.0%), 受けていなかった(13.8%)
日本留学の最終取得学位	学士(5.2%), 修士(3.4%), 博士(50.0%), 取得しなかった(41.4%)
留学中の同居者	独居(70.7%), 配偶者と同居(15.5%), 友人と同居(5.2%)
帰国後の進路	前職復帰(51.7%), 新しい職に就いた(39.7%), 再留学した(3.4%), その他(1.7%)
留学前の最終学位	高校(1.7%), 専門学校(1.7%), 大学同等学歴(8.6%), 学士(77.6%), 修士(10.3%), 博士(0%)
日本の大学(院)入学前の日本語学習	日本の日本語学校(3.4%), 中国の大学(6.9%), 中国政府の日本語予備学校(大連・吉林)(43.1%), 日本語専修班(20.7%), 独習のみ(17.2%), 学習しなかった(1.7%), その他(1.7%)

2 帰国中国人留学生の留学中の適応過程

ここでは、すでに帰国した中国人留学生の日本留学中の適応過程に関して、「日本の気候」「日本の食事」「日本の住宅条件」「日本の社会習慣・風俗」「日本の大学の教育方法」「日本人の人間関係」「日本人の考え方・価値観」の7つの領域を設定し⁹⁾、各項目について、「次のことに慣れるのに、来日してからどのくらいの時間がかかりましたか」とたずねた。領域別に単純集計(表8)と累積比率(表9)を示す。

「気候等の基本的生活環境」→「社会習慣／教育方法」→「日本人との人間関係／日本人の考え方・価値観」の順に時間を要する傾向は、在日留学生の場合と同様である。「日本人の人間関係」「日本人の考え方・価値観」が慣れるのに困難な領域であることが、ここでも裏付けられている。

表 8 来日後慣れるのにかかった時間（帰国中国人留学生（N=58）） (%)

項 目	時 間	来日後 1月 以内	来日後 1月～ 6月	来日後 6月～ 1年	来日後 1年～ 2年	来日後 2年 以上	留学終 了まで 慣れな かった	無回答
日本の気候		87.9	6.9	3.4	1.7	0	0	0
日本の食事		55.2	32.8	8.6	1.7	1.7	0	0
日本の住宅条件		56.9	31.0	8.6	1.7	1.7	0	0
日本の社会習慣・風俗		19.0	44.8	24.1	10.3	0	1.7	0
日本の大学の教育方法		20.7	37.9	20.7	12.1	5.2	1.7	1.7
日本人の人間関係		10.3	37.9	29.3	15.5	3.4	3.4	0
日本人の考え方・価値観		12.1	15.5	36.2	12.1	13.8	8.6	1.7

表 9 来日後慣れるのにかかった時間（累積比率）（帰国中国人留学生（N=58）） (%)

項 目	時 間	来日後 1月 以内	来日後 6月 以内	来日後 1年 以内	来日後 2年 以内	来日後 2年 以上	留学終 了まで 慣れな かった	無回答
日本の気候		87.9	94.8	98.3	100.0	100.0	0	0
日本の食事		55.2	87.9	96.6	98.3	100.0	0	0
日本の住宅条件		56.9	87.9	96.6	98.3	100.0	0	0
日本の社会習慣・風俗		19.0	63.8	87.9	98.3	98.3	1.7	0
日本の大学の教育方法		20.7	58.6	79.3	91.4	96.6	1.7	1.7
日本人の人間関係		10.3	48.3	77.6	93.1	96.6	3.4	0
日本人の考え方・価値観		12.1	27.6	63.8	75.9	89.7	8.6	1.7

なお、在日中国人留学生に比べ、期間が全体的に短い傾向がみられる⁽¹⁰⁾。最も遅い「考え方・価値観」でも、6割が1年以内に慣れたとしている。この傾向は、1983年以前の留学開始者が7割を越え、1988年以前の留学終了者が9割であるなど、留学後にかなりの時間が経過している回答者が多いため、回想による経験の縮約に帰因する可能性がある。

3 帰国中国人留学生の帰国後の再適応過程

帰国中国人留学生の母国への再適応過程に関して、「中国の住宅条件」「中国の社会習慣・風俗」「中国人の人間関係」「中国人の考え方・価値観」「中国

表 10 帰国後慣れるのにかった時間（帰国中国人留学生（N=58））（％）

時 間 項 目	帰国後 すぐ	帰国後 1月 以内	帰国後 1月～ 3月	帰国後 3月～ 1年	帰国後 1年 以上	まだ 慣れて いない	無回答
中国の住宅条件	48.3	6.3	6.9	20.7	5.2	12.1	0
中国人の考え方・価値観	37.9	13.8	17.2	13.8	5.2	3.4	8.6
中国人の人間関係	36.2	12.1	10.3	19.0	6.9	10.3	5.2
中国の社会習慣・風俗	32.8	10.3	15.5	17.2	8.6	10.3	5.2
中国の商業的サービス	6.9	12.1	15.5	15.5	12.1	32.8	5.2

表 11 帰国後慣れるのにかった時間（累積比率）（帰国中国人留学生（N=58））（％）

時 間 項 目	帰国後 すぐ	帰国後 1月 以内	帰国後 3月 以内	帰国後 1年 以内	帰国後 1年 以上	まだ 慣れて いない	無回答
中国の住宅条件	48.3	55.2	62.1	82.8	87.9	12.1	0
中国人の考え方・価値観	37.9	51.7	69.0	82.8	87.9	3.4	8.6
中国人の人間関係	36.2	48.3	58.6	77.6	84.5	10.3	5.2
中国の社会習慣・風俗	32.8	43.1	58.6	75.9	84.5	10.3	5.2
中国の商業的サービス	6.9	19.0	34.5	50.0	62.1	32.8	5.2

の商業的サービス」の5領域を設定し、各項目について「次のことに慣れるのに、帰国してからどのくらいの時間がかかりましたか」とたずねた。領域別に単純集計（表10）と累積比率（表11）を示す。

母国に対する再適応の場合には、日本での慣れに比べ、要する時間は短い。このことは、留学以前に既に年齢が高く、母国文化を十分に取得していたことが影響しているものと考えられる⁽¹¹⁾。しかし、逆にみれば、留学前には「慣れ」そのものが意識にのぼることのないような領域に、数ヶ月の期間とはいえ、帰国者は慣れるのに時間を要する、ともいえるのである。

なお、「商業的サービス」は特異な分布を示している。1988年以前に9割が日本留学を終えているにもかかわらず、3割以上が「まだ慣れていない」であることは、興味深い知見といえよう。

ところで、日本人の帰国後の再適応については、近年、多数の研究がなされるようになってきている。一方で、日本で学んだ留学生が、帰国あるいは

第三国に移住し、どのように再適応をおこなったのか、あるいはおこなえなかったのか、という視点はあまり設定されてこなかった。しかし、この視点からは、①「日本からの帰国者」の再適応と「日本への帰国者」の再適応を比較すること、②（どの国から帰国したのかによって、その再適応過程が大きく異なる可能性を考慮し）「日本からの帰国者」の再適応と「日本以外の国からの帰国者」の再適応を比較すること、さらに、③「日本からの帰国者」に特有の困難があるならば、それは何に帰因するのかを分析すること、④「（日本での生活を経てから帰国せずに）第三国に移住した人」の適応と、「直接（第三国にあたる国に）移住した人」の適応を比較すること、などといった重要な課題が設定できる。今後は、この視点を重視すべきであることを指摘したい。

Ⅳ 大学新入生の入学後の適応過程

1 調査の概要

ここでは、（新環境への移行者という側面を共有する）「大学新入生」の入学後の適応過程を分析することで、間接的に留学生の適応を論ずるものとする。

調査の概要は表 12 の通りである。

表 12 1 年次生調査の概要

1 年次生調査	
調査対象者	T 大学工学部 1 年次生
調査実施	1991 年 3 月
調査方法	郵 送／同封の封筒にて返送
標 本 数	150 票
回 収 率	77 票 (51.3 %)
備 考	対象者は、都内の理工系大学工学部の 1 年次生である。

回答者の主な属性をみると、年齢は 19 才 48.1 %, 20 才 44.2 %, 21～31 才 7.8 %, 国籍は日本 100 %となっている。性別は、男性 83.1 %, 女性 16.9 % と男性が多い。新入生を調査対象者としたので当然であるが、入学年度は 1990 年 4 月が 100 %である。

2 大学新入生の入学後の適応過程

上記の学生に対して、「大学の教育方法」「大学での勉強方法」「大学周辺の

表 13 入学後慣れるのにかかった時間（1 年次生（N=77））（％）

時 間 項 目	1 ヶ月 以内	1 ～ 3 ヶ月	4 ～ 6 ヶ月	7 ～ 12 ヶ月	まだ 慣れて いない	無回答
周囲との対人関係	44.2	32.5	14.3	5.2	3.9	0
大学周辺の地理・交通	39.0	37.7	14.3	0	9.1	0
大学の教育方法	22.1	48.1	11.7	7.8	10.4	0
大学生の考え方・価値観	26.0	29.9	11.7	11.7	19.5	1.3
大学での勉強方法	11.7	36.4	24.7	11.7	15.6	0
大学生活全般	18.2	28.6	24.7	20.8	7.8	0

表 14 入学後慣れるのにかかった時間（累積比率）（1 年次生（N=77））（％）

時 間 項 目	1 ヶ月 以内	3 ヶ月 以内	6 ヶ月 以内	12 ヶ月 以内	まだ 慣れて いない	無回答
周囲との対人関係	44.2	76.6	90.9	96.1	3.9	0
大学周辺の地理・交通	39.0	76.6	90.9	90.9	9.1	0
大学の教育方法	22.1	70.1	81.8	89.6	10.4	0
大学生の考え方・価値観	26.0	55.8	67.5	79.2	19.5	1.3
大学での勉強方法	11.7	48.1	72.7	84.4	15.6	0
大学生活全般	18.2	46.8	71.4	92.2	7.8	0

地理・交通」「周囲との対人関係」「大学生の考え方・価値観」「大学生活全般」の 6 領域を設定し、「次のことに慣れるのに、入学してからどのくらいの時間がかかりましたか」とたずねた。領域別に単純集計（表 13）と累積比率（表 14）を示す。

項目が同じではないが、留学生の場合（表 5 参照）と比べてみると、慣れに要する時間は概ね短い。各項目とも、1～3 ヶ月の回答者が多く、この間に比率が急激に増加する傾向がみられる。最も早く慣れるのは「周囲との対人関係」であり、以下「地理・交通」「教育方法」には 3 ヶ月で、「考え方・価値観」「勉強方法」「大学生活全般」には半年で 7 割前後が慣れたとしている。

各々 12 ヶ月（1 年）後には、8 割ないしそれ以上が慣れている。しかし、「大学生の考え方・価値観」や「大学での勉強方法」は、他に比べてやや慣れの

ペースが遅れている。「考え方・価値観」において、「まだ慣れていない」は2割であり、留学1年目の留学生が「日本人の考え方・価値観」で示した5割(表5参照)に比べれば確かに少ない。しかし、日本人学生であっても、周囲の「考え方・価値観」に戸惑いがちなのは(その深刻さは別として)留学生と共通なのである。

次に「大学生活全般」をみると、3ヶ月以内に慣れているのは半数以下である。すなわち、日本人学生でも、夏休みの前までに慣れるのは半数以下なのである。

以上、大学新入生の入学後の適応過程を分析してきた。項目が同じではないため、留学生との十分な比較ができず、現状を簡単に記述するにとどまった。今後は留学生の統制群として明確に位置づけられるような調査設計をおこない、比較研究を実施していきたい。

V おわりに

本研究では、様々な領域に対する「慣れ」に着目し、この定義に基く各主体の「適応に要する時間」を得た。「時間」の評定が回想に依ること、適応領域の対応が厳密でないため、主体間の対照が不十分であること、適応領域の設定において、留學生活の多様な側面を十分に組込めていないこと、などの限界は課題である。

II～IV章の各章においても、重要な課題を提示してきたが、ここでは、今後の発展のために、さらにいくつかの課題を提示しておきたい。そこで、今後の課題として主なものを以下のようにまとめ、本稿を終えるものとする。

(1) 様々な移行者の「慣れるのに要する時間」との比較

本研究の調査対象者となる留学生は、中国人留学生に限定されていたが、異なる国の留学生においては、異なる過程が存在するであろう。したがって、異なる国の留学生間の比較が課題となる。さらに、「日本人留学生」が留学先の国の様々な領域に慣れるのに要する時間との比較も、重要な視点となろう。

また、留学生に限らず、ビジネスマンなどにも着目し、「異文化移行問題における適応主体の分類」⁽¹²⁾(図1)に示されるような各主体について、新環境に慣れるのに要する時間に関する研究をかさね、考察を深めていくことが、重要な課題である。

(2) 「慣れ」の規定要因分析

どのような留学生が、どのような領域に早く慣れ、どのような領域になかなか慣れないのか、といったことについては、本研究では詳しく分析してい

図 1 異文化移行問題における適応主体の分類

国 籍		移行先社会		社会的地位		代表的な問題の適応主体
日本	外国	外国→日本	日本→外国	学 生	非学生	
○		○		○		「帰国子女」
○		○			○	「帰国ビジネスマン」「残留孤児」
○			○	○		「日本人留学生」
○			○		○	「在外ビジネスマン」
	○	○		○		「在日留学生」
	○	○			○	「難民」「外国人労働者」
	○		○	○		「帰国外国人留学生」
	○		○		○	「帰国外国人労働者」

ない。そこで、「慣れ」の規定要因の分析が課題となる。とくに、日本語能力の高低、チューターの援助の内容、周囲の日本人の対応などの要因との関連は重要であろう。また、逆に、早期適応者や未適応者は、自分の留学過程や留学先国としての日本に対して、どのような意識を持っているのか、などの分析も大きな課題となる⁽¹³⁾。

(3) 適応困難項目の探索

本研究では、留学生において「日本人との人間関係」「日本人の考え方・価値観」への慣れが遅れることを指摘したが、さらに多様な項目を準備することで、新たな適応困難項目を探索・発見していくことが課題である。

(4) 領域間の相互関連システムの分析

特定領域の慣れの遅れと、他の領域や留学生生活全般の慣れの遅れとの関連、といった領域間の相互関連に関する分析は、あまり研究されてきていない。しかし、ある領域に慣れないことが、他の領域への慣れをも阻害してしまう、というような、領域間の相互関連について分析することは、適応を援助する際の重点領域を設定するうえで、大きな意義がある。この点に関する分析が課題となる。

(5) オリエンテーション・プログラムへの具体的な資料提供

留学生に対する「オリエンテーション・プログラム」の構築に際し、「適応に要する時間」に関する基礎的情報は、適切な時期や期間の長さ等を設定していくうえでの重要な資料となろう。そこで、今後はプログラム構築への資

料提供を意識した研究をすすめることが課題となる。なお、日本人学生においてさえ、入学後1年たっても「まだ慣れていない」領域があることを考慮すれば、日本人学生に対するオリエンテーションに関する研究も、発展として重要であろう。

以上、本研究は基礎的な分析にとどまったが、環境移行者の適応過程に関する多面的な視点からの考察は、今後も継続の予定である。

注

- (1) 例えば、小林哲也他『在外帰国子女の適応に関する調査・報告』、京都大学教育学部比較教育研究所、1978年。塚本美恵子「帰国子女の適応過程——帰国年齢・経過期間との関連についての母親の調査報告」、『東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要』第5集、1989年、93-110頁。
- (2) 上原は、来日1年目の留学生と大学院入学1年目の大学院生の適応状況を比較している。また、塚本は、適応過程における文化の範囲を明確にするために、海外帰国生と国内の「転校生」との比較を提案している。上原麻子「留学生の異文化適応」、『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』、広島大学教育学部、1988年、111-124頁。塚本美恵子、前掲論文、1989年。
- (3) 帰国留学生への質問紙調査の分析としては、例えば、碓氷尊「帰国外国人留学生へのアンケート調査の結果に関する報告」、『筑波フォーラム』第23号、1985年、135-152頁、岩男寿美子・萩原滋『日本で学ぶ留学生——社会心理学的分析——』、頸草書房、1988年などがあるが、まだ数は少ない。
- (4) 「適応」概念自体については、多様な定義がなされている。辞典等から抜き出した例を下に示す。

「①その状況によくかなうこと。ふさわしいこと。あてはまること。②生物の形態・習性などの形質が、その環境で生活・繁殖するのに適合していること、あるいはそう判断できること。現存の生物の形質の多くは適応的であるが、そのすべてが適応しているとは限らない。主に遺伝的な変化についていうが、そうでないものがあり、狭義には後者を順応と呼んで区別することがある。応化。」(『広辞苑 第四版』、岩波書店、1991年)、「生活環境に応じて生活体が自らの生存に適した体形や習慣を示したり、生理的变化をするようになる過程、またはそのようにしている状態」(『新版心理学辞典』、平凡社、1981年)、「最も広い意味では、個体のもつ各種の欲求を環境的諸条件に適合させつつ円滑に実現してゆく過程を呼ぶために用いられる言葉であるが、さらに厳密には、環境的諸条件というものを社会からの要請と限定し、個人がこれに適合するような行動様式に従うこと」(『社会学辞典』、有斐閣、1958年)、「いわゆる「最適者生存の原理」によって環境条件に最もよく適合した生物が生き残り繁栄するという生物学でいう「順応(適応)」の考え方から派生してきた概念。本来は生物の世界における種の進化に関して用いられたこの考え方が、しだいに人間の生活や行動のさまざまな側面に使用されるようになり、「環境の条件やその変化に対して、自分を適切に変えていき、自分と自分

を取り巻く環境との間に調和のとれた関係をつくりだす過程、あるいはつくりだせている状態」を「適応」と呼ぶようになった」(『国際教育辞典』, アルク社, 1991 年)。このように, 概念自体が一般に多義的である。

「適応」を「状態」とみるか「過程」とみるかについても議論がある。斉藤は, 戸川による「適応とは環境の諸条件と個体の諸条件との間に成立する関係であって, 両者がなにかの点で一致または調和の関係にある場合に, その個体は環境に対して適応状態にある」を前者, 北村による「主体としての個人が, その欲求を満足させながら環境の諸条件のあるものに, 調和的關係をもつ反応をするように, 多少とも自分を変容させる過程」を後者の代表的定義として比較したうえで, 人と環境との関係の力動性から, 適応を「過程」として捉えている。また, 佐々木も, 「適応は, 状態だけでなく, 過程をも含む概念である。それは, 生体が自己の要求を満たし, 環境との調和した関係を得ようとして努力していく過程を表わしているのである」としている。斎藤耕二「帰国子女教育の適応・人格形成・日本語習得に関する研究」, 東京学芸大学海外子女教育センター編『国際化時代の教育』, 創友社, 1986 年, 244-275 頁。戸川行男『適応と欲求』, 金子書房, 1956 年。北村晴郎『適応の心理』, 誠信書房, 1965 年。佐々木正宏「適応の基礎」, 大貫敬一・佐々木正宏編著『心の健康と適応』, 福村出版, 1992 年, 第 6 章。

「個体と環境との調和性」を重視している点では, 各定義は概ね共通しているが, 確定的な定義を提示するのは困難である。また, 異文化における「適応」概念については, 近年その有効性について検討や批判がなされてきている。例えば, 江淵一公「帰国子女のインパクトと日本の教育——「帰国児を生かす教育」の視点から」, 『社会心理学研究』, 3 巻 2 号, 1988 年, 20-29 頁。

- (5) このような定義と質問形式は, 適応という複雑な現象を考察するうえでは, あくまで簡便法にすぎない。方法論的・概念的に問題を含むのはあきらかである。しかし, 回答しやすく, また解釈しやすい, という利点がある。
- (6) 岩男寿美子・萩原滋, 前掲書, 1988 年, 第 3 章。
- (7) もちろんこれはあくまで目安にすぎない。また, 標準的な傾向がこのようであるとしても, 個人的な事情など様々な要因で期間は変化する。
- (8) 岩男寿美子・萩原滋, 前掲書, 1988 年, 139 頁。
- (9) 「日本での留學生活全般」は, この調査の段階では項目に含まれておらず, 後の在日中国人留學生調査において追加された。
- (10) 「在日留學生よりも帰国留學生のほうが日本人や留學経験を好意的に評価する傾向」について, 岩男・萩原は次のように論じている。「日本にいた頃には不満を感じていたことも日本を離れて時間がたつとなつかしい思い出に変質していくため, 日本での留學経験や日本人に対して好意的な評価が生じているのだろうか。あるいはきわめて反日的な態度をもって帰国した人たちがこうした調査への回答を忌避する傾向があるために, 結果として日本に好意的な意見が表面化しやすくなっているにすぎないのだろうか」(岩男寿美子・萩原滋, 前掲書, 1988 年, 95 頁)。
- (11) 渡航前に母国文化を十分に取得していない, 例えば幼児の再適応の場合であれば, 事情は大きく異なることが予測される。

- (12) 村田雅之「異文化適応研究における多層認知モデルの導入と展開」、『異文化間教育』, 第7号, 1993年, 142-152頁。
- (13) 在日中国人留学生の「慣れるのに要する時間」と「日本留学評価」(「母国の友人が留学するかもしれないと連絡してきた場合, あなたなら……日本への留学を勧める／日本への留学を勧めない」)との関連を表15に示す。
「日本の大学の教育方法」「日本人の考え方・価値観」においては, 時間を要する人は勧めない, という傾向が明らかにあらわれている。

表15 慣れるのに要する時間と日本留学評価 (在日中国人留学生) (%)

領 域		評 価	日本留学 勧 め る	日本留学 勧めない	領 域		評 価	日本留学 勧 め る	日本留学 勧めない
日本の 気 候	① (103)		45 6	54 4	日本の大学の 教育方法	① (50)		60 0	40 0
	② (4)		75 0	25 0		② (21)		52 4	47 6
	③ (2)		50 0	54 4		③ (23)		21 7	78 3
	④ (1)		100 0	0		④ (10)		20 0	80 0
日本の 食 事	① (84)		47 6	52 4	日本人の 人間関係	① (34)		67 6	32 4
	② (8)		50 0	50 0		② (22)		36 4	63 6
	③ (7)		57 1	42 9		③ (22)		36 4	63 6
	④ (10)		30 0	70 0		④ (29)		37 9	62 1
日本の 住宅条件	① (76)		50 0	50 0	日本人の 考え方・価値観	① (29)		69 0	31 0
	② (8)		37 5	62 5		② (18)		61 1	38 9
	③ (8)		62 5	37 5		③ (30)		36 7	63 3
	④ (14)		21 4	78 6		④ (29)		27 6	72 4
日本の 社会習慣・風俗	① (56)		55 4	44 6	日本での 留学生生活全般	① (43)		55 8	44 2
	② (26)		26 9	73 1		② (26)		65 4	34 6
	③ (12)		41 7	58 3		③ (26)		19 2	80 8
	④ (11)		45 5	54 5		④ (9)		22 2	77 8

(注)①：来日後6月以内 ②：来日後6月～1年以内 ③：来日後1年以上 ④：まだ慣れていない

①～④右の()内は人数。

参考文献

- 浅井義弘他「滞米日本人留学生の適応過程に関する研究——滞米学生の特性と適応過程」, 『日本大学生産工学部報告』, 16巻1号, 1983年, 59-77頁
- 江淵一公「異文化適応のメカニズム——文化人類学的考察——」, 『教育と医学』, 34巻10号, 慶応通信, 1986年, 4-11頁
- 原芳男「日本の留学生問題の新段階——社会科学者の立場から」, 『IDE 現代の高等教育』, 301号, 1989年, 12-18頁
- 広島大学大学教育センター『日本の大学院教育に関する留学生の意見調査』(『大学研究ノート』第52号), 1982年
- 星野命「概説カルチャー・ショック」, 星野命編集・解説『カルチャー・ショック』(『現代のエスプリ』161号), 至文堂, 1980年, 5-30頁
- 石附実『日本の対外教育——国際化と留学生教育——』, 東信堂, 1989年
- 村田雅之・原芳男「留学生の適応過程(1)——「適応に要する時間」に関する分析——」, 『日本社会心理学会第33回大会発表論文集』, 1992年, 98-99頁

長井進「交換留学生受入れ家庭からみた異文化交流」，高橋順一・中山治・御堂岡潔・

渡辺文夫編『異文化へのストラテジー』，川島書店，1991年，84-92頁

大橋敏子「留学生オリエンテーションの課題」，『異文化間教育』，第5号，1991年，49-65頁

渡辺文夫「対人関係Ⅴ——異文化接触における対人行動」，中川大倫・山口勸編『社会心理学』，日本放送出版協会，1989年，112-123頁

山本多喜司『異文化環境への適応に関する環境心理学的研究』昭和60年度文部省科学研究費（一般研究B）研究成果報告書，1986年

追 記

- 1) 本研究の一部は，日本社会心理学会第33回大会（1992）において発表した。
- 2) 本研究のデータは『留学生の適応過程における相互理解の構造に関する研究』（文部省科学研究費補助金（一般研究C）研究代表者：原芳男）による。
原芳男先生に深く感謝いたします。また，在日および帰国中国人留学生調査の実施に関し，王薇氏に深く感謝いたします。